

明治新政府の官僚・漢詩人

## 秋月新太郎と谷謹一郎

さとうたくみ

(会員 佐伯市池船町)

はじめに

「米百俵」の話は、小泉元総理が所信表明に引用してにわかにな有名になった。幕末の越後長岡藩は戊辰戦争に敗れ窮状にあったが、分家の三根山藩から百俵の救援米が届いた。藩の文武総督小林虎三郎はこれを窮民・藩士に配分せず、「教育を普及し人材を育成することこそ国家繁栄の礎」として、整備中であつた「国漢学校」の教育費に充てた。明治三年(一八七〇)の話である。

してみれば、安永六年(一七七七)藩校四教堂を創立し、天明元年(一七八一)に佐伯文庫を開設した佐伯藩主毛利高標は、余程先見の明あつた名君と言わざるを得ない。その日本屈指の教学の恵を受容した佐伯藩士が、

又影響を受けた佐伯人が、文明開化の明治期にどのような活躍をしたのか興味深いところである。

そこで明治期に何らかの著作を残した人物を検索してみた。矢野龍溪・藤田茂吉・佐藤蔵太郎などは「佐伯市史・人物誌」に掲載され衆知のところであるが、秋月新太郎は「佐伯郷土の碑文」益田学著や「佐伯史談・佐伯の詩文集」羽柴弘著に紹介されている程度で、その詳細は明らかではない。また谷謹一郎については全く記載がなく、狩生熊義先生が大分合同新聞に連載した「佐伯の文人・子玉と秋室」に『秋室遺稿』の出版者として谷士徳(謹一郎)を紹介しているに過ぎない。

これまでインターネットや古書によつて知り得た情報を披露したいが、多くは漢詩集のため不得意ながら独断と偏見で解釈せざるを得なかつた。諸先輩方の御教授・御叱責を乞う。

## 一、秋月新太郎

「明治百年記念・咸宜園入門簿抄・広瀬宗家」

(五二) 秋月必山

天保十二(一八四二)年に生る。佐伯の人橋門の子。

名は士新、字は瑞華、通称新太郎、号に必山、玉池、七硯堂、天放、無可有、秋畝、七山、七剣人、七剣童等がある。安政二年（一八五五）水筑務の名で入門。

後佐伯藩の儒官。明治四年（一八七二）兵部省に出仕し兵部中録となり、後東京（女子）高等師範学校長。

文部参事官を兼任。退官後貴族院議員に勅選。大正二年（一九一三）歿。享年七十三。詩に長じ、「天放存稿」等の詩集がある。

秋月新太郎は佐伯藩校四教堂の教授・秋月橋門の子で父の推薦によって日田咸宜園に学び、帰郷して四教堂の助教を勤めていた。

### （一）長三州との出会い

慶応二年（一八六五）勤王の志士・長三州が幕府の追手を逃れ秋月家へ逗留したことがある。

長三州は日田郡出身で咸宜園の先輩である。長州高杉晋作の奇兵隊に参加、帰国して同志を募ったが、代官窪田鎮勝に追跡を受け佐伯の秋月橋門を頼った。慶応二年（一八六五）のことである。二月六日、新太郎は長三州を

伴って堅田石打に梅見に訪れている。共に詩作を楽しんだ一時であったが、やがて佐伯へも幕府の手配が廻りやむを得ず新太郎は長三州を領外へ見送った。

長三州去歳（慶応二年）長州より逃れ將に謀る所あり。幕吏（幕府の役人）の緹捕（追手）に会うこと甚だ急

なり。すなわち名姓を変え、余が家に來寓す。今春に至つて踪跡（ゆくえ）稍露れ、藩の俗吏（役人）惶懼（おそれおどろく）し、逐客（外来者を逐う）の令を下す。余窃かに送り床木村に至る。酒店に就き共に飲む。

大いに時事を論ず。別れて後二日に賦（詩作）す。

紫髯（欧米人）の舶（大船）城たり、万里に飛電を

逐い、禁海（鎖国の海）に來たりて錨を下ろす。

恣に蹂踐（ふみにじる）するを欲す。津吏（港の

役人）誰何（誰か）あらん。宰相肉（身）皆く顛し、

獨謀りて眼前を安んじ、甘受して彼輩に騙る。（後

略）

（『知雨楼詩存』より）

佐伯を去つた長三州は再び長州に戻り、倒幕軍に参謀として従軍した。明治四年新政府の文部省に出仕、同五

年「学制」起草委員となり「学制」の発布・「小学教則」の交付に寄与した。その後二人は明治新政府の官僚として、また漢詩人として交流が続いた。佐伯小学校に長三州の揮毫した「佐伯小学」の扁額が現存している。



長三州肖像



長三州書「小学習字本」明治10



(二) 兵部省に出仕・西南戦争に従軍

明治二年(一八六九)一月、秋月橋門(水筑龍)は初代葛飾県知事となり上京しているが、新太郎は在郷しており、明治三年(一八七〇)四月八日、大坂本「金馬橋」の碑文を書き、「藩助教水筑新土□撰併書」と署名している。  
 (益田学著「郷土佐伯の碑文」参照)

おそらく明治四年(一八七二)の廢藩置県後、藩校四教堂も閉鎖されたので、毛利家と共に上京して明治新政府の兵部省に出仕したものであろう。(新太郎三十二才)

明治五年(一八七二)兵部省は廢止され陸軍省と海軍省が分置された。『明治政府職員録』によると明治八年(一八七五)、秋月新太郎は乃木希典等と共に陸軍歩兵少佐・従六位となっている。

明治十年(一八七七)二月、西南の役起こる。官軍は陸軍大将有栖川熾仁親王を征討総督に、陸軍中将山県有朋・海軍中将川村純義を参軍として九州へ発向した。このとき新太郎は参謀官として山県有朋の配下にあつた。

木留山觀戦

○王旅(天皇の軍団)單々(ゆつくり)と大旗(大きな旗)を擁し、將軍詔(みことりの)を奉じて西征

に赴く。劍は野日に光閃して無色、砲は天雲を響震して有声。乱を貪り一時荼毒を逞すも、朝に会し遠からず清明を見る。言を寄せる廊廟（朝廷）の諸君子、善後治方の至誠（まごころ）在す。

#### 田原坂戦二首

○方うは是忘身決死の時、飛弾戎衣を透かすも閑せず。

劍は電の如く人は虎の如く、一道の血烟吹く雨に飛ぶ。

○桓々と壮士猛きこと雷の如く、一隊今朝戦捷に回る。鮮血淋漓（したたる）の刀未だ拭わず、樽前に立ち疵肩切り来る。

#### 王師都城を収む

○猛士林の如く將に驕らず、錦旗落々（まばらな）馬蕭々（ものさびしい）。反人（むほんにん）は春時の雪に似たるあり、旭日の光中に次第に消えたり。

#### 〔知雨楼詩存〕拔粋

開戦より七ヶ月を経て九月、秋月新太郎は鹿尾島の本営にいた。二十四日、西郷の籠もる城山総攻撃が終わり、総大将西郷の胴体は発見されたが首がない。山県参軍は陸軍少佐千田登文に再度搜索を命じた。千田は一薩兵を

捕らえて尋問したところ、岩崎谷の折田庄助邸の門前右側に埋めたことが判明した。

#### —西南役殊勲者千田登文翁の実話—

#### 西郷の首級を前に山県参軍の落涙

#### （前略）

淨光明寺の井戸で首をていねいに洗い、飯櫃を裏返しにしてその上に首を載せて山県参軍の前に差し出した、すると山県参軍は『我が日本の軍隊を御指導なされながら遺憾にも方向誤りなされたか』とハラハラと涙を流して敬礼された。そして通信専務の秋月新太郎に平定の電報を東京へ打たせた。首実検の場所は本営の奥座敷であったが、すでに胴体の方は白木の棺に納めてあったのでこれへ首も納められた。

（昭和二年十月二十二日、大阪朝日新聞）

終戦後、参謀総長・山県有朋は秋月新太郎を参謀本部陸軍部編纂課長に推して本営の征戦記録を編纂させ、明治十三年（一八八〇）九月、『明治十年・征討軍団記事』と題して陸軍文庫より発行された。これは後に編集され明治二〇年（一八八七）に刊行された各旅団の戦闘記録

『西征戦記稿』の大綱を示すものであった。

同じく十三年十月、激戦の地・田原坂に「崇烈」の碑が建立され、秋月新太郎が筆を揮った。

西南の役「崇烈」の碑文（熊本県植木町田原坂）

鹿兒島県は西海に於いて地最も広く、人最も勇にして、西郷隆盛の名望世を蓋い海内の人士、其の進退を候い以て安危と為すに至る。明治十年二月高盛反して熊本城を囲む。

天皇震怒したまい兵を発して之を討たしむ。熾仁を総督の責に任じ、陸軍中將山縣有朋、海軍中將川村純義、参軍たり。賊兵を分かちて植木山鹿の両道を扼す、進んで高瀬に入る。廿七日我軍高瀬を撃取す、越えて四日木葉を抜く、賊退いて田原坂の險に拋る。而して熊本本の囲み益々密にして援路みな絶ゆ。夫れ田原の地たるや両崖壁立し径路崎嶇たり。賊悉く精銳にして堅塁を築き咆哮して出没するは虎狼の如く有り。要害形を異にして我軍殊に死の戦いなり、昼夜をすごすこと十有七日遂に之を抜く。此の役の死傷四千余人なり。鏖戦前後数百、而して田原坂の劇の如きは未だ有らざるなり。苟しくも此の坂にして抜かずば賊をして南関



を破りて北すれば、則ち四方不逞の徒必ず隙に乗じて起こり禍測るべからず。而して其れを此に至らしめず、遂に速やかに討滅するに至らしむるは、実に此の一捷に由る。嗚呼、死者の功大なり。而して焉んぞ見るに及ばず、痛ましい哉。因つて碑を坂の上に建て以て之を記す。蓋し忠烈を勧奨する所以なり。

明治十三年十月

陸軍大将二品大勲位熾仁親王 撰文 竝 篆額  
陸軍省六等出仕従六位勲五等 秋月新太郎書



有栖川熾仁親王



山県有朋

### (三) 山県有朋と秋月新太郎

山県有朋は天保九年（一八三八）長門萩に生まれ、新太郎より一歳年長である。明治十六年（一八八三）から内務卿、同十八年（一八八五）から内務大臣を務め、明治二十二年（一八八九）第三代内閣総理大臣となった。

一方、新太郎は少書記官から議官補兼任となり、明治二〇年（一八八七）十一月内務省参事官から書記官に転任、同二十四年（一八九一）三月には内務大臣秘書官正六位秋月新太郎に特旨を以て陞叙の件が提案されている。まさに山県有朋の栄進を追うような転進出世である。

明治二十七年（一八九四）三月、女子高等師範学校校長兼文部省参事官に更任された。翌二十八年六月に女子高等師範学校から発行された『女子教育管見』は秋月新太

郎の女子教育に対する所信とも言えるもので、先進各国と我国の状況を統計学的に比較検討した教育論である。

#### 一、我国女子教育の実況

人を教育するには平等調和の発達を期すべしとは、現時学者一般の定論にして……明治維新以来、百般の制度文物の進歩も著大なるといえども、なお女子教育は男子教育に比すれば、その行われるところ狭く且つ低き事は独り教育者のみならず世人も同様に認める所ならん。然れども尚これを統計の事実に徴せば一層の明を加ふべし。（以下略）

同二十七年頃から、山県有朋は幕末の自伝「懐旧記事」を秋月新太郎に口述筆記させた。これは安政五年から慶応三年までの山県の行動記録であり、明治維新につながる長州討幕派の記録でもある。「懐旧記事」は明治三十一年、和装五冊本として刊行された。

明治三十一年五月、文部省参事官を退職していた秋月新太郎は山県の推挙によって貴族院議員に勅撰された。同年十一月、山県は再び第九代総理大臣となり第二次山県内閣を組織したのである。

当時の新聞切抜に次のような記事があつた。

(前略)

▲公山縣は能く自家の手腕を自認するもの士に下り士を養ひ、好んで顧問補助者を作る、所謂四天王が公山縣を囲みて恒に政界の一角に雄飛するは之が為なり。

▲強て公山縣の旧時の秘書的人物を求めば秋月新太郎および中山寛六郎なり、されど二子者の公山縣における関係は今日にあつては極めて疎、独り高嶋張輔は公が唯一の文藝的秘書なり。

(後略)

(切抜き、年月社名不詳)

一般に山県の人気は余り好くなかつたという。その風貌から「キリギリス」とあだ名され、彼が卒以下(最下級武士)の出身であつたこと、権力好き・勲章好きであつたことなど色々と揶揄されたが、昭和天皇のように軍人として評価する者もいた。武骨者であつた反面、茶や和歌を好んだという。

山県の邸宅(椿山荘)は目白にあり、また別荘(小滝庵)が大磯(神奈川県)にあつた。新太郎は「大磯の山

県將軍」あるいは「椿山將軍」と唱え、『見栄を張ることに不慣れた書生が酔い狂う(本性を現し本音を吐く)ことを、將軍は許しただ楽しんだ』と詩っている。

ある夜、大磯の山県から「好い酒があるので飲みに来い」と使者があり車を走らせた。

將軍に招かれ行く (『知雨樓詩存』より訳)

海もしくは吹く波は夜も死せず、流雲なかば寒月を捲て紫たり。將軍の使者消息あり、喚ばれて我ももう酔夢を起さる。軽車沙を軋つぶして風よりも疾し、上がり来たれば画閣(うつくしい高殿)に蘭燈

(うつくしい灯籠) かがる。湘中(湘南に居るとき)

濁酒しか飲まず、將軍何処より黃封(高貴な酒)を得たり。芳香(よいにおい)芳烈(はげしいかおり)

鼻を壁きて衝き、三碗して磊落(心が大きくなる)心胸に澆る。我を呼び飲ますの情何ぞ切ならんや、

海鮮狼藉(とりちらかす)して紅玉(顔色があかくなる)を截つ。酔つて外套を卸し星光(野外)に立

ては、八朶芙蓉(富士の高嶺)に千仞(ひじょうに深い)の雪。

深い)の雪。

#### (四) 秋月新太郎の交友關係

新太郎は生来の酒好きであつた。「天放道人てんほうどうじん（新太郎の号）鶴のごとく痩せ、酒を嗜むの外、他に業なし」、また「酒は口で飲まず書は目で読まず、酒は気で飲み書は心で読む」などと自ずから詩う。

退職したころ湘南に別荘を構え「知雨楼」と名付けた。時折俗事を逃れて逗留したが「半ば詩翁、半ば酒徒」、酒詩にふける日々を過ごした。したがって交友關係も広く著名な漢詩人が多い。「知雨楼詩存」に所収された人物名の一端を紹介しよう。

△長三州（前述）上京して再会、新太郎は「石内観梅」を追憶した詩を三州先輩に贈つた。また先輩の家屋が風雨で破損した時には見舞いの詩を贈っている。明治二十八年三月十三日没、六十三歳。新太郎は「：文星昨夜光芒滅す。学海誰に従い津を問うべし。」と三州先生の挽詩を詠んで悼んだ。

△高島張輔 天保十五年（一八四四）長門国萩の藩医良台の長男として生まれる。画家高島北海の兄。藩校明倫館で学び維新後は内務省や宮内省などの諸官を歴任して図書亮となつた官吏。詩書に優れ漢詩人として

も有名、九峰と号す。

新太郎とは同じ山県の秘書官として最も親交の深かつた人物である。「同じ微官として皇京に在り、二十年來肝胆を傾く。君子の交わり水淡のごとく、文辞無敵は風生するに似たり。：老い去りて吾儕われら旧朋少なく、白頭相對して論評細やか。」と新太郎は詩を贈り、張輔は「知雨楼詩存」の序文に「君は博識強敏、最も文辞に長ず。その詩に於いては、滔々とうとう數百言を咄嗟の間に成したり。」と評し、互いに賞賛する仲であつた。

△谷謹一郎 旧佐伯藩士、藩校四教堂に学び維新後官吏となる。明治十一年パリ万博視察団に加わり、その時に詠んだ漢詩十九篇が『海外觀風詩集』に掲載されている。明治の漢詩人、詩集『空也集』『湘南稿』『余瀝集』などがある。字士徳、朝軒と号す。

新太郎は秋月良種（淡山）と谷謹一郎（士徳）と梅見に玉川で遊んだことがある。互いに往き來して詩作を楽しんだ。

△香雨女史・石黒忠正・曾根荒助・水原慈音・長谷川方省・高井幸・藤島了穩・赤松蓮城・幸田彦右衛門・福島安正・三樹頼・井上毅・小野湖山（以下略）





静養中の所、薬石その効なく十日午前十一時逝去せり。享年七十五才。

●此のほど亡くなった秋月新太郎翁が壮年の頃、藩主の扈從こしゆうをして愛宕山に登ったところ、藩主は『彼様な色の黒い男が乃公の臣おれか』と言われたので、一つ話になって居たそう。

(六) 秋月新太郎の残した郷土の碑文

①高妻芳州墓誌銘

(佐伯市山際養賢寺墓地)

文久二年六月二十二日没

(一八六二)

劉新(新太郎) 謹撰併書・劉之龍(秋月橋門) 書

②金馬橋の碑

(佐伯市弥生大坂本)

明治三年庚午四月八日

(一八七〇)

藩助教水筑新士 撰併書

③毛利高範頌徳表

(佐伯小学校所蔵)

明治十七年三月十八日

(一八八四)

正六位勲五等 秋月新謹撰併書

④敵愾の碑

(佐伯市臼坪岡ノ谷招魂所)

明治十九年五月

(一八八六)

陸軍大將式品大勲位熾仁親王 題額

正六位勲四等 秋月新太郎 撰併書

⑤高野金作君戦死碑 (佐伯市鶴岡海福寺境内)

明治二十八年六月 (一八九五)

正五位子爵毛利高範 扁額

文部相参事官従五位勲四等秋月新太郎 撰

⑥川野君碑 (佐伯市稲垣龍護寺境内)

明治三十年十月 (一八九七)

陸軍歩兵大佐従五位勲三等功四級 福島安正

女子高等師範学校校長従五位勲三等秋月新太郎撰書

⑦床木隧道竣工記念碑 (佐伯市弥生床木)

明治三十五年壬寅六月 (一九〇二)

従三位勲二等功三級男爵 石黒忠恵 篆 額

正五位勲三等 秋月新太郎 撰文併書

知雨樓詩存 日

一余頃築一小樓于後園以爲吟哦之所取陸劍南聽雨詩意名曰知

雨樓方其落成之時點檢畢功因命以知雨樓存稿云爾于時

明治四十五年壬子五月 天放山人 秋月新識